

「令和5年度(2023年度)の学校教育自己診断の結果・分析」

— 大阪府立福井高等学校 —

(1) 全般

生徒アンケート:29項目中27項目UP。保護者同:23中20UP。教員同36中29UP。コロナ禍の制約が大幅に解消されたこともあろうが、教育活動全般を通して一定以上の成果をあげた1年間であったと自負する。特に本校の教育活動について特徴があるかの問いに対して、生徒:86%、保護者:90%、教員:100%が肯定していることは、総合学科で日本語指導の特別枠選抜を実施していることという「形」だけでなく「中身」にも特徴が詰まった内容が行えたことの証と素直に喜ぶたい。

一方、前年比で下がったところを見ると、生徒は生徒会・部活動で-3%、保護者はHPで-8%、教員は授業についての相互見学・意見交換等で-6%である。生徒の生徒会・部活動については、生徒会はポストコロナ禍に向けて、体育祭・文化祭をはじめとして大いに活動・活躍したのだが、部活動について、長く中断したり・制約されたりしたことの影響がまだ残っていることが理由、保護者のHPは、コロナ禍に関する迫られての閲覧がなくなったことと、一斉メールによる情報提供が定着したことなどが理由、教員の授業については「教育活動について日常的に話し合っている」の項目は21%UPとなっているので、新指導要領に基づく3観点での評価についての会議・研修が一段落したことが理由とそれぞれ考えられるが、部活動の活発化、外部への情報発信、授業の更なる工夫・発展、今後とも努力するべきところと考える。

(2) キャリア教育の推進—「夢から発見」—

生徒の「将来・進路」、「進路・奨学金」の項目はいずれも伸び、9割の生徒が高評価している。ただ反面「豊かなころや人の生き方」の項は82%の肯定を受けているものの-1.7%。こちらは下がっている。大学等のオープンキャンパス情報の提供など、都度すべきことの案内などについてはより充実したものの、ときに有名人や身近な人も含めての命を考える機会ともなっていたコロナ禍の影響が薄らぎ、「人とは」と問うなど、大きな意識にかかる内容については、授業等での深め方をより工夫することが求められていると考える。

環境・多文化共生・外国といった言葉をキーワードとする項目は、生徒・保護者・教員ともに高い値を保ってさらに伸ばしている。緑豊かな学校で学ぶゆえの地球温暖化に対する意識、多くの外国由縁の生徒(コスモス生)とともに学んでいることが、学校全体に高い意識をもたらしていると考え。

(3) 確かな学力の定着—「発見から実現」—

授業のわかりやすさについての肯定値は、生徒:74%、保護者:65%と高いとは言えない。教員は学習指導の工夫・改善について100%努力していると意識しており、生徒も84%が教員は工夫していると評価してくれているが、まだ改善の余地ありと判断する。あわせて学習指導要領の趣旨の項目について、教員の肯定値が71%であることについてはご心配な向きもあると思うが、これについては3観点の評価などを取り入れ、より主体的により個人でまた集団で考え議論させてい

こうという取り組みについて、まだ工夫するべきところが多々と思うこと、あるいは情報機材や Web 環境を使うにあたって、学校では通信環境等に課題があり、またリスク管理も重要であるため、個人で使うに比べてはるかに使いづらく、学習指導要領で想定されていることが実現しにくいと感じていることも含んでの数字であることを申し添えたい。

(4) 安全で安心な学びの場づくり

「いじめ」については、どんな学校・場所にも起こり得るとの認識で、「まさか」とか「…に限って」とかいう先入観を持たずに対応することが大切と考えている。よって、学校が相談を受けたり、気になる状況を知ったりした場合には、必ず何らかの対応を行う。具体の対応としては、程度や当事者の意向も踏まえて、様子を見守る場合から、相手とその保護者も含めてご相談させていただいたり、外部機関との連携を取ったりすることなどを想定している。アンケート結果も教員の肯定は 100%で、知ったり・感じたりした場合には放置しない意識でまともまっている。ただ生徒・保護者の数字は 82%・89%。学校が気づいていないことがあったり、対応についての十分な満足はまだ得られていなかったりしていると思われる。以上を再認識して、今後とも対応してまいりたい。加害の側と言われた場合には、生徒:全くそんなつもりはなかった、保護者:この程度でと思われることもとは存じますが、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

事故・災害といったことへの対応については、生徒の数値は 4.6%向上しているが、保護者・教員の数値は下がっている。生徒の在校中に何等かが発生した場合についての、HR等での指示がよく伝わったことで、生徒の数値は上昇。一方、コロナ禍が一段落して、リスクに対する情報発信の回数が減ったこと、また年度内を通して国内でも風水害や地震への危機感が高まっていることがこの数値と考える。

事前に暴風警報等が出る場合には休校する。あるいは昨年冬の大雪のときのように、危険や交通混乱が想定される場合には、生徒が自宅を出る時刻の前に、自宅待機の一斉メールを発信するなど、危険回避を一番にして対応してまいりたいので、ご家庭でも万一の場合の家族間での連絡方法の確認等、どうぞよろしくお願いいたします。

(5) 多文化共生・地域連携・保幼小中高大連携

学校規模は小さいが、日本語指導があり外国由縁の生徒が多数在籍し、障がいがある生徒も学ぶ高校。鉄道の駅からは遠い立地ゆえに、近隣自転車圏の生徒比率が高い学校。「ちいさな総合学科」で互いを認め合ってもに学び、地元:茨木(とその周辺)で幸せに暮らす。緑も多い本校周辺、本校生徒の多くが暮らす近隣地域は、鉄道の駅からは遠くとも暮らしやすい場所だ。ゆえに本校卒業後も自宅やその周辺に留まって、進学・就職するものが多いという特徴がある。茨木やその周辺には将来働くに良い職場も多々揃っていると思う。

「ちいさな総合学科」で学び、「茨木で幸せに暮らす」。

遠方から(ときに外国出身で)本校を選んで進学してきた生徒が、茨木の良さに包まれて、将来茨木で働きたいと希望することもある。

多文化共生、地域連携・保幼小中高大連携については、上記のコンセプトのもととても大事なこ

とともに位置付けている。保護者の地域や交流に関する肯定値が 94%、92%と高く、教員の数値も 90%に達しているのは、その考え方で教育活動が盛んで、一定成果をあげていると評価されているとも推測できよう。一方、生徒の値が 2.4%伸びたもののまだ 77%にとどまっているのは、学校として地域等と連携・交流する活動をしているのは知っていても、自分自身は参加したことがない生徒がいること、また遠方から電車通学している生徒の「地元」との交流はないことが表れていると考える。

外国から日本に来て大阪市に住み本校に通うコスモス生徒は、本校地元の小中学校や地元地域の行事などにも参加して、自身も楽しみつつ、小中学生や地域にも喜ばれている。他市から来る日本の生徒も含めて、本校地元の茨木との交流を深め、生徒が将来の働く場を茨木周辺に求めるようになる高校、それが魅力となって進学希望者が来る学校。地域連携はますます大切に、地元での保育実習・福祉実習も含めて、ますます盛んにしていきたい。

(6) まとめ

福井高校の入学選抜の受験者数は、一般選抜終了の時点で令和 5 年・6 年と 2 年続けて 159 人。府立高校全体の受験者数が大きく減る中で、本校は定員を 40 名増やして募集したため（令和 5 年:160 人、令和 6 年:200 人、ともに日本語指導の特別枠の人数を含む）、倍率は 1.00 倍から 0.80 倍に下がっているが受験者数は同数である。校内で学ぶ生徒の満足度と、志願してくる方の期待度については変わっていない、むしろ向上していると自負する。

「ちいさな総合学科」で「茨木で幸せに暮らす」。

福井高校は Google マップによれば、JR 茨木駅から 3.8 km、徒歩 54 分。バスを使って 20 分に立地する。府立高校の中では鉄道駅から最も遠い学校の 1 つだが、大阪市内等から通ってくる日本語指導の外国由縁の生徒も多々在籍している。また、地元でもない、日本語指導の生徒でもない他市町からの生徒には、中学校の先生に紹介されるまでは福井高校については、全く知らない、どこにあるかはもちろん名前も知らなかったということも少なくない。「総合学科」についても、よく知らなかったとしばしば伺うことだ。それでも本校まで来てくれた方が多数いる中で、生徒への質問の多くが肯定値 80%以上（70%未満は 1 項目のみ）という結果が出ていることは、教員が前向きな教育活動の工夫やいじめ対策など安全・安心への取組みに努力していることもあろうが、それより何より、生徒のみなさんが相互の違いを認め合って、障がいがある方も含めて、ともに学ぼうとしていることがこの数字になっていることと分析する。

定員割れしていることについて、悲しく感じている生徒や心配してくださっている保護者や地域の方には、学校の魅力発信にかかる力不足、誠に申し訳ないところですが、少なくとも現在在校している生徒、また志願してくれているみなさんについては、ともに学ぶ良き仲間であることを再確認できた数字、アンケート結果であると考えます。

令和 6 年 3 月 18 日 校長 内田 正俊